
梅雨時のお隣さん

みより

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

梅雨時のお隣さん

【Nコード】

N4858J

【作者名】

みより

【あらすじ】

梅雨のときに書いたお話。

？
(前書き)

梅雨時に書いたお話です。

?

「ふわぁー……」

口元から欠伸が漏れても、僕は大きく開いた口を隠すことなく歩き続けた。

目の前にはどんよりと重くのしかかった灰色雲が広がる。

今にも雨は降りそうで、お天気お姉さんが朝から爽やかな笑顔で、お出かけの際は傘をお持ち下さい、と言っていたことをぼんやりと思いつ出した。

僕は二回目の大欠伸をしながら体を左に傾けた。

頭上から落ちてきた物を傾けた体の擦れ擦れのところでかわして安堵したのもつかの間、避けたはずの物が方向転換してわき腹に当たった。

「い、痛い……」

僕は打撃を受けた箇所を擦りながらしかめっ面で振り返ると、腰に手を当てて偉そうに家のお隣さんが立っていた。

お隣さんの艶々とした黒髪は白く小さな顔を柔らかに包み込むように伸びていて、腰まである長さにもかかわらず癖もなく真っ直ぐだった。

黒目がちな大きな瞳は光を含んで表情豊かに動き、その目に見つめられると吸い込まれそうで、鼻は小ぶりだが形はよく、唇は朝露に濡れた今にも咲きそうな蕾を連想させる。

肌はきめ細かく陶磁器のようで、だが弱々しい雰囲気などなく内側から光り輝いて、これからいくらでも美しく成長するだろうと思

われる少女に誰もが目を離せなくなる。

僕は友達がお隣さんを表現した言葉を悠長に思い出していた。
友達はある言っても、目の前のお隣さんは実際のところ友達の想像通り少女ではなくて、僕にとって恐怖の対象でしかないのだが、それも慣れてパニックに陥ることもない。

今朝だって殴られて痛い思いをしたから、今度こそは避けようと頑張ったのにお隣さんの方が一枚上手で、どう足掻いても僕はお隣さんの遊び道具でしかないんだな、と思い知らされたただけだ。

「まだまだだね！」

勝気に笑うお隣さんは傘をくるくると回しながら近づいてきた。
今が梅雨だからってお天気お姉さんが毎日毎日あの台詞を言うから、お隣さんは律儀に傘を持って出かける。

実際、今年は空梅雨気味でお天気お姉さんの言うことなんてほとんど当てにならないのにもかかわらず律儀に持って出かけるから、お隣さんの傘は雨具ではなく僕への凶器としてしか働きを持たなくなっていた。

——ああ、あのピンク色の可愛らしい凶器が忌々しいよ。毎朝殴られる僕の身にもなってみてよ。

言葉にならない思い——決して恋焦がれてとかではなく——を胸にしまいこんで、嫌味をばやくのが僕には精一杯だ。
嫌味に聞こえるように微笑みながら言えば、少しは威力が上がるだろうか。

「あこさん、その傘の色よく似合っているよ」

今日、お隣さんが持っていたのは昨日まで持っていた水色のとは違うピンク色で、僕より頭二個分背の低いお隣さんはそのピンク色の凶器をまたも俺の頭上目掛けて振り下ろし、うるさい、と叫んだ。しかし真正面から見ていたお陰で、太刀筋を見切った僕は片手で手首を掴んで受け止めて、上から見下ろしながら微笑んでやった。口よりも先に手が出るお隣さんは悔しそうに顔を歪め、すかさず手ぶらの方の手が飛んできたが、それも僕はいとも簡単に受け止める。

「無理しちゃダメだよ」

「無理なんかしてない！　もう！　この手を放しなさいよね！」

両手首を捕まれて身動き取れなくなったお隣さんは言葉にならないうめき声をもらしながら、男の僕にとってなんら意味のない抵抗をしていた。

「だーかーらー、無理しちゃダメだって。熱上がっちゃうからね」

僕の言葉にお隣さんはビクッと反応して動きが止まる。

勝気な瞳から一転動揺を隠しきれずに揺れ動く瞳が僕を見上げた、一瞬だけ。

「あこさんのことだから昨日の雨で傘忘れた人に自分の傘を貸してあげて、自分は雨の中帰って来た。そして風邪ひいて熱だして、でも休むと貸してあげた人が心配するから学校へ行く……っていうとこかな」

小さなお隣さんを抱きかかえ——よくキザな男の人がよくやる抱きかかえ方で——今来た道をさかのぼる。

素直じゃないお隣さんは何言っても聞き入れてくれないから、こ
うやって実力行使をするしかないと思ってお姫様抱っこをしたわけ
だったけど、何故かもうお隣さんは大人しくなっていた。

僕の腕の中で俯いて何も言わないし、なんの抵抗もないから、恥
ずかしさだけがこみ上げてくる。

ふとお隣さんと目があつた。

「どうして、あたしが風邪ひいたってわかったの？」

「今日は殴られてもあんまり痛くなかったし、スピードもキレもな
かったから。伊達に毎日殴られているわけじゃないよ」

「馬鹿！ もう全部アンタのせいだからね。昨日だって、どうせ女
の子とデートとかで先に帰っちゃったのでしょ。だからあたしは濡
れて帰る羽目になったんだからね！」

僕はわざとらしくため息をついた。まさかこんなことになるとは。

「僕は誰にも相手にされてなんかいませんよ、あこさんじゃあるま
いし」

「もう馬鹿にしないでよ！ じゃあどうして昨日先に帰ったのよ？」

もう一度わざとらしくため息をつく。

「あこさん、今日誕生日でしょ。プレゼント用意してないとむちゃ
くちや怒るから」

えっと小さな声を漏らし、お隣さんは顔をあげた。その瞳には涙
が溜まっている。

今にも零れ落ちそうな涙は、支えきれなくなった下まつげの間から一つ二つと落ちていき、お隣さんは自分が泣いていることに気付いて大げさに僕から視線を外した。

「雨降ってきたね。梅雨だから仕方ないよね」

お隣さんはそっと呟き、僕は何も言わずに歩を進めた。
ハッピーバースデー、梅雨時のお隣さん。

? (後書き)

あとがき。

今回は亜香里様から頂きました管理人みよりの初めてキリ番リクエストです。

いつもは亜香里“さん”と呼ばせていただいて仲良くさせてもらっているのですが、こういうときは“様”をつけてみました。

なんかそれっぽいと思いませんか？

あ、あたしだけかな？

そんなことより亜香里さんもラブファンタジーをお書きになっているので、一度ご覧下さい。

相互リンクを頼みたいのですがどうもタイミングが掴めず、ここでちょこっとアピールしておきます!!

※現在はお陰さまで相互リンクしていただきました☆

さてさて、テーマは『梅雨』か『青』ということをおっしゃって、書き始めは『青』も意識していたんです。

でもいつも間にか『青』のことをすっかり忘れてしまいました。

書き上げて一息ついたところで思い出して、どうすることもできずにオロオロしただけです。

い、いやね、あこさんの持っているピンク色の傘を『青』色にすればいいんじゃないかと考えたんですけど、考えデリート。

実を言えば、この“梅雨時のお隣さん”の前に三つボツにしたのがありまして。

このボツにした作品の最初ぐらいは『青』も意識してたんですよ。ホントそれがいつの間にか消えていて、『梅雨』だけになってしまいました。

興味ないと思いますが、ボツにしたのはその名も“梅雨時のゝ”シリーズ。

“梅雨時の傘事情”

“梅雨時の旅行日和”

“梅雨時のお隣さん（2）” ↑これは全く別のモノ

どれもこれも全く違うもの！

と言いたいけどたぶん似たり寄ったり。

気が向いたらアップしますー。

はい、気まぐれに。ニャー。

……なんちゃって。

？
(前書き)

？の続きではないですが、出てくる人物は同じです。

?

昨日のあこさんはどこか元気がなかったから、僕は気にかけていたつもりだった。

本当はもっと前からあこさんの異変に気付いてはいたんだけど、あこさんが辛くても何でも無いように振舞うからどうすればいいのかわからないでいた。

慰めて欲しい、と言わなくてもわかるぐらい元気がなかったら解かりやすくしてこっちも対処しやすいのに、いつも思う。

泣き虫で一人でこっそり泣くことが多いくせに、どうして未然に防がせてくれないのだろう。

あーあ。

すぐ殴る、すぐ怒る、素直じゃない、そんなあこさんがなんでいつの間に僕を中心になっているんだ？

お隣さん、だからじゃなくて、たぶん僕は――。

「見付けた」

僕の声は早朝の、まだ朝日の昇らない濃紺の空へと吸い込まれて誰の耳にも届かずに消えた。

もう一度、今度は大きな声で呼んでみようとして、止めた。

静かに立ち止まり、後ろ姿を眺める。

時が流れゆくのと同時に空は淡い色になっていき、濃紺から青色へとなっていた。

その空を仰ぎ見ているあこさんは、僕が捜していた、その人。

やっぱり、あこさんは青が似合うと思う。

あこさんの愛らしい顔立ち——顔だけは認める——から、お隣さんはピンク色のような華やかな色が似合う、と友達が豪語していた。だけど、それは違うよ、だってあこさんは——。

「何突っ立っているのよ?!」

いきなり声をかけられて、考えていたことが跡形もなく吹っ飛んだ。

気付かれているとは思いもしなかったから、余計に。

僕はあこさんに、後頭部に目がついているのか、もしくは気配を感じ取ることが出来るのか、と疑いたくなった。

だって僕に背中を向けたまま、一度だって振り向かないで声をかけてきたから。

「いつから気付いてた?」

笑みを浮かべながらあこさんの隣に座った。

眼下には冷えた空気のせいで、縮まって動けなくなってしまったような町並みが広がっていた。

「アンタに教えてあげる義務なんてないでしょ」

早朝の冷たい風より鋭い言葉だが、でも、それにももう慣れてしまっただけで、今ではそれが当たり前となってしまうている。

「まあね、そんな義務ないね」

自分でも呆れるぐらい、僕は軽薄な笑みを浮かべていた。

もうあこさんは何も言わなかったから僕も笑みを消して無表情を装った。

あこさんが押し黙ると、次に何と言えればいいのか、どうすればいいのかわからなくなる。

いつも僕を振り回して、一方的に喋るくせに、だんまりを決め込むなんてあんまりだ。

調子が狂う。

しばらく間を置いて、頼りない自分に言い聞かすように、こう心の中で呟いた。

それにしても、気の利いた言葉の一つも言えないのだろうか、と。

何度か言葉を練り直し、これが僕の考えられる最高に気の利いた言葉だ、と思えた瞬間、あこさんが突然口を開いた。

急に沈黙が破られ、その隙間に一生懸命考えた言葉が滑り落ちていく。

もうすでにどんな言葉だったか思い出せない。

「知っているんでしょ、家のこと」

「あ、うん……一応お隣さんだし」

目の前に僕の母さんが浮かび上がり、さびしそうな笑顔で話しかけてきたのを思い出した。

さびしげな声の音色すらも。

——あこちゃんのお父さん、行ってしまうらしいの。

それだけ言うと母さんは消えた。

そして、やけにはつきりとあこさんの姿が目映るようになった。

「じゃあ、慰めなさいよ。アンタでも気の利いた言葉の一つぐらい、言えるでしょ」

ただでさえ折角考えた言葉を忘れてしまったというのに、あこさんの強気な声を聞いて、更に単語が抜け降りていく。

僕の頭は、砂が落ちきってしまった砂時計のように空っぽだ。

空っぽゆえに、僕はこんな行動に出ているのだろう。

抱きしめているなんて、この僕が、あのあこさんを。

冗談でお姫様抱っこをしたことはある。

だけど、面と向かって抱きしめる日が来るとは、思いもしなかった。

あこさんの冷え切った体が僕を冷静にさせて、この状況を自分がしているんだと気付かれた後にじわじわと染み込んでくる暖かな気持ちなんだろう。

この気持ちのせいで、あこさんを抱きしめた腕を緩めることが出来ない。

相手の弱っているところを付け込んでいる、とわかりつつも。

「帰らないの？ 今日だよ、おじさんが行ってしまうのって」

「帰らない。どうせパパはあたしがいなくても行ってしまうもの。心配なんて少しもないのよ、絶対」

そんなことないよ、と言いかけて、僕はいきなり声を失った。目で見ただけじゃないのに、あこさんが泣いていることに気付い

てしまったから。

「パパはあたしより大切なものが他にあるっていうの？　あたしにはパパより大切なものなんてないのに……」

あこさんのか細い声は、とてつもない力で僕の心を締め付けた。痛む心を慰めるかのように、腕に更なる力を込める。

しかし、その行動はあこさんに向けられたものじゃなくて、自身のために。

目蓋を下ろせば、おじさんの人のよさそうな笑顔が浮かんできた。丸っこい顔に黒目がちの二つの目が細められている。

おとぼけな顔をして、ひょうきんな声で話し、一緒にいると落ち着くあこさんのお父さん。

頼りなさげだけど、見た目よりずっとしたたかで、あこさんの気持ち思い通りに操る……というより、そうなるように仕向ける、という方がしつくりくるけど。

「あのね、うん、家に戻ってちゃんとパパを見送ろうと思う」

ほらね、やっぱり。

あこさんはおじさんのことが大好きだから、そのことをわかりすぎているぐらいわかっているおじさんは、迎えに行かなくても家で待っているだけでいいんだ。

僕は皮肉めいた驚嘆のため息を吐き出し、腕の力を抜いた。

ゆつくりと僅かに、しかし確実にあこさんとの距離が離れていく。僕たちは黙ったまま、気まずい沈黙の海に、そわそわと目を泳がせていた。

しばらくの後、あこさんが静かに口を開き、それまでの遅い行動から想像もつかないほど、勢いづいた声を発した。

「か、帰る！」

その威勢のいい言葉は気まずい空気を吹き飛ばしたが、一人空間に取り残された気がして、僕は目をぱちくりさせた。

あこさんの赤くなった目は真っ直ぐ僕の目を見ていて、鋭い眼差しが意識と思考を半ば強引に繋ぐ。

本調子ではないだろうが、あこさんは元来の気の強さを取り戻しつつあるようで、僕は肩の力を抜き、気を緩めた。

「帰ろうか。早くしないとおじさん行っちゃうかもしれないし？」

僕は意地悪く見える笑顔を浮かべた。

「え、やだ！ アンタなんか置いて先に行く！」

あこさんは台風のような勢いで僕から離れていくが、しかし突然立ち止まり、軽やかに振り返って、叫んだ。

「気が変わった！ 早く来なさいよ。迎えに来てくれたお礼に、一緒に帰ってあげる」

「お気遣いなくー」

「な、なに生意気なこと言っているのよ?! そんなこと言っていないで早くきなさい! アンタのせいでパパを見送れなくなったら、一生許さないんだから!」

「はいはい」

僕は嬉しい気持ちを押し隠して、困ったような笑顔の仮面を顔に貼り付けた。

小走りであこさんの隣まで行き、一緒に歩調で歩き始める。

「パパ、あたしのこと少しも忘れないでね。毎日電話してね」

あこさんのくぐもった声が、僕の耳に通ってから消えた。

その後に声を発する者は居らず、あこさんはじっと動かない。

そんな中で唯一動くのは、あこさんの背中を撫でる手と、和服の袖。

背の小さなおじさんはあこさんの姿で隠れて見えなくて、撫でる手がまるで空中から伸びてきているようにも見える。

「あこ、そろそろパパを放しなさい。もう時間だわ」

いつまでに抱きついていいるあこさんに、おばさんが痺れを切らして言い放った。

あこさんはゆっくりと、本当にゆっくりと時間をかけて、おじさんから離れてく。

おじさんの丸い顔の輪郭が現れた。

相変わらず人のよさそうな笑顔を浮かべ、お気に入りウグイス色の和服を着ている。

「たった三週間の辛抱だよ。新しい小説を書くために調べておきたいことがある。何度も言ったであろう？」

うん、と小さな声を漏らしたあこさんはとても幼くみえた。

「いってらっしゃい」

あこさんは縋り付くように握っていたおじさんの手を静かに放し、微笑んだ。

それを見たおじさんは満足げに微笑んだ顔で頷いて歩き始めると、一度も振り返ることもなく、行ってしまった。

「僕はどこにも行かないよ」

「えっ、何か言った？」

「別になにも」

僕が微笑むと、あこさんはしかめっ面をした。

その僕たちの頭上には、青一色で丁寧に塗りつぶされた青空が広がっている。

「青空も雲がないとなんだか寂しいね」

あこさんはもう怒ってはいなくて、雲の一つもない、ただっ広い空のどこを何を見ているのかわからない目は青く染まっている。

——やっぱり。

僕はあこさんの横顔を見ながら、心の中にそっと浮かび上がって

きた言葉の意味を拾い上げた。

——あこさんは空に似ている。

気まぐれに表情を変え、手の届かないところにいて、そして、とても澄んでいる。

ああ、僕は何を考えているんだ。

そんなことを迂闊に言葉に出してしまったら、恥ずかしくって顔から火が燃え上がりそうだ。

考えを吹き飛ばそうと、顔を左右に振る。

それを見て、あこさんは怪訝な表情で呟いた。

「何しているのよ？」

「うん？ いや、なにも……そうだ！ 僕は風になりたい。あこさんに殴られずにすむから」

「人聞きの悪いことを言わないでよ！ あたしが暴力女みたいじゃないの！」

あこさんはそう言ったくせに、僕はもう二回も頭を殴られていた。痛む頭を撫でながら、あこさんの背中を見つめる。

殴るだけ殴って、あこさんは行ってしまう。

やられっぱなしで終わらせるもんか！

「暴力女、じゃなくて、フォザコン、だろ？」

「別に構わない！ だってあたしはパパが大好きだもん！」

あこさんは少しも恥ずかしがる様子を見せずに、大声で叫んだ。
その台詞は聞いているこっちが赤面してしまいそうなのに、あこさんは満足げで勝ち誇った笑顔をしていた。

うん、やっぱり、僕は風なろう。

あこさんという青空を独り占めして、見えないように覆い隠してしまう、おじさん雲を吹き飛ばせるぐらい強い風に。

? (後書き)

こんばんはー。

圧倒的に真夜中に出現率が高いみよりです。

もし、これを読んでいる方が夜以外ならごめんなさい。

次回機会があれば真夜中あたりで会いましょう。

そしたら、あいさつはこんばんは、ですみますから (笑)

それはさておき。

亜香里様、今回は1100 Hitのギリ番&リクエストしてくれて
ありがとうございますっ！

リクエスト内容は前回のリク (梅雨時のお隣さん) の続きが見たい
ということでした。

前回のリクを頂いたときに、未消化だった”青”も意識していたの
にお気づきでしたしょーか？

……はい、わかりませんでしたよね (笑)

いいです。

気にしないで下さい。

ちょっとした遊び心でしたから。

もしマニアックな人がいて気付いてくれたら本望です。

はい、ここで登場人物についてお話したいと思います。

今回の主人公は僕、もしくはあこさんにアンタ、と呼ばれる男の子
です。

亜香里様に名付け親になってもらおうとしたんですが、叶わず (笑)
基本、あたしの書く男の子は女の子に名前と呼ばれないので、決め
てなくても大して影響がでないわけです。

うん、でも、コイツもまあ、へたれ男の子ですねー。
ホント、一回でもいいからへたれじゃない男の子が書いてみたいものです。

あ、それより名前付ける技術が欲しいな（＾・＾・）
苦手なんです、名前付けるの。

お名前、いつでも大募集です（笑）
素敵なお名前お待ちしてます。

あこさんは、うん、ファザコンです。

パパが大好きです。

ちなみにパパは小説家で、あこさんはパパと似てません。

もちろん、あこさんはママとも似てません。

それに特に意味はありませんが（笑）

普通とはちよつと違った家庭に生まれたんだよー、と言いたいだけです。

見た目が、という意味で。

うーん、なんて言えばいいのかな？

例えれば、ビー球からダイヤモンドが生まれてきた、みたいな。

えへへ、わからんだろうな（o。w。o）

まあ、いいや♪

このたびはここまでお目を通して頂き、真にありがとうございます。
た。

キリ番&リクエストして頂いた亜香里様にはたくさんの感謝を、他
の読者様にも変わらぬ愛を捧げますっ！

どうもありがとうございます。

>Div Align="right"<2008. 11. 23
進呈>/Div<

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4858j/>

梅雨時のお隣さん

2010年10月21日21時55分発行